

幼小中一貫の教育課程編成プロセスにおける教師の教育観の変容 —附属松本学校園の「くらし」領域のカリキュラム開発を事例として—

中村 祐介 高度教職開発コース

キーワード：学びの連続性，学びの領域，くらし領域，資質・能力

1. はじめに

信州大学教育学部附属幼稚園・小学校・中学校（以下、附属松本学校園）は、平成 28 年度より「学びの総合化」をテーマとした幼小中一貫の教育課程開発研究に着手した。

幼稚園では、遊びの中に学びの萌芽を見出し（遊びの視点），小学校との連続性を保証していく【遊びの学び化】，小学校では，資質・能力を身の回りで活用する力を育成する【学びの教科化】，中学校では，資質・能力を実生活で有機的に活用する力を育成する【教科等の総合化】をキーコンセプトに，幼小中の学びの連続性を教育課程に具現できるよう実践を通してカリキュラム開発研究に取り組んできた。

このうち小学校低学年（1～3 年）段階では，教科間の互惠性をできるだけ断ち切ることなく緩やかに融合していくことを目指し，「ことば」「かがく」「くらし」「ひょうげん」の 4 領域からなる「学びの領域」を設定している。そして，子どもの学びの姿を教科枠にとらわれずに受け止め，そこで育つ資質・能力を深める意識に基づいた授業実践から教科内容の基礎を育成する実践を模索してきた。

こうした学校課題を抱える中，くらし領域部会と幼小接続・連携の主任として，カリキュラム開発に取り組んできたが，戸惑いと試行錯誤の連続でもあった。しかし，カリキュラム開発に取り組み，その新しい枠組みに基づいた授業実践を行う中で，私自身もつ教育観が少しずつ変容し，教師としての大きな学びがあったとも感じている。

そこで本稿では，くらし領域のカリキュラム開発と幼小接続・連携に取り組む中で，教師が何に立ち止まり，どのような葛藤や迷いを抱え，それをどう乗り越え自らの教育観を変容させてきたのか，その足跡を整理し直し，教師としての学びを自覚することを目的として論じていく。

2. カリキュラム開発

2.1 附属松本学校園の子どもたちにみられる資質・能力

幼小中合同教員会（2016.6.14）にて，「附属松本学校園の子どもたちに貫かれている資質・能力は何か」について，全職員で話し合った。そして，それぞれの校園の実践で伝統的に大事にしてきたことや目の前の子どもたちの姿をもとに，「自己表現力」「課題探究力」「社会参画力」の 3 つの資質・能力を見出し，全職員で共有していった。

さらに，幼小中合同教員会（2017.2.6）で，3 つの資質・能力を発揮している附属松本

学校園の子どもたちの姿について、グループに分かれて話し合った。その日の日記に、私は次のように綴っていた。

幼小中の職員で、3つの資質・能力についての子どもたちの姿を語り合った。幼稚園の先生たちとは、公開研究会や教育実習等を一緒にやってきたので話をしたことはあったが、中学校の先生たちと話すのは初めてだった。でも、とても楽しかった。「この姿、中学校でもある」「これが松本三校園の子どもたちのいいところだね」と意気投合する場面もあった。この3つの資質・能力は「三校園に貫かれている」そんなことを感じた。

この時感じた「楽しさ」は一体何だったのか。振り返って考えてみると、「今あるものを見付ける楽しさ」であり、「子どものよさを見付ける楽しさ」であったように思える。子どもをみようとした時、「これが足りない、あれが足りない」と教師が設定する理想の子ども像を前提に足りないものやできないことばかりに目を向けてこなかったか。その減点法の発想から「どのように補うか」という立場で授業をしてこなかったか。教師としての自分の内にいつの間にか構築していた子ども観や授業観を問い直さざるを得ない状況に立たされたのであった。

2.2 3つの資質・能力と具体的な子ども姿

附属松本学校園で共有された3つの資質・能力について、「くらし領域」における実践でイメージする子ども姿を部会で検討し、表1のように整理した。

表1 資質・能力と具体的な姿

自己表現力	課題探究力	社会参画力
身近な人々、社会及び自然を体全体で受け入れ、感じたことや気付いたことについて、言葉や絵、動作、劇化等の方法により自分らしく表現することができる。	自分なりの思いや願いをもって、身近な人々、社会及び自然と関わる中で、自分自身やそれらの特徴やよさ、関わり等に気付くとともに、それらに関連付けながら、よりよい課題解決の方法を考えることができる。	集団の中での自分の役割や行動の仕方に気付き、生活をより豊かにしていくために、友と協働することができる。

この作成過程で、「くらし領域としての自己表現、課題探究、社会参画とは何か」「4つの領域の違いは何か」ということが話題になった。この時の日記に、私は次のように綴っていた。

今日の部会。話題が領域同士の違いに及んだ。私は「対象の違いじゃないか」と述べた。すると、A教諭は「対象への視点なのではないか」、B教諭は「対象への見方・考え方なのではないか」と述べた。最近、こういう話合いがとてつもなく楽しい。私としては紀要を形にしていきたい気持ちもあるのだが、自然とこういう話題になってくる。「領域の可能性は何か」「教師の立ち位置はどこか」など、それぞれの“領域観”とでも言おうか。決して答えが欲しいわけではない。それがぶつかり合うことが楽しい。だから、もっと同僚や幼稚園の先生の声が聴きたくなる。同僚と問い合いながら創り上げていく楽しさを感じ始めている。

今までの部会を振り返った時に、「この文章で伝わるか」というような書類審査をしていたことが多かったように思える。しかし、誰も経験したことのないカリキュラム開発に取り組むことで、方法論的な議論から少しずつ、それぞれの教育観がぶつかり合うような議論が増えていったように思える。この時、同僚と「領域同士の違い」を考え合ったことをきっかけとして、くらし領域から学びの領域へと、私の視野が広がっていったのではないかと振り返る。

「領域や教科が先にあるのではなく、子どもが対象に浸り込む姿の中に領域や教科の内容が生まれてくる」と捉える私になっていた。

4. 教職大学院での学びを振り返って

こうして、カリキュラム開発に基づいた授業実践を積み重ねる中で、私の中に起きていた教育観の変化を振り返りつつ、綴った日記をもとにあらためて読み返してみると、私自身が「問うてきたこと」が変わってきたということが見えてきた。初めは「くらし領域とは何か。そして、それをどう形にしていけばよいのだろうか」という問いであった。しかし、今私の内にあるのは「子どもにとっての学びの領域とはどんなものなのか」という問いであるように思える。問いが点から面になった、そんな感覚である。

この問いの変容は、私自身が第1学年の担任と幼小接続・連携を任されたことにも大きく起因すると思う。振り返ってみると、研究開発計画書の理解と教科を融合することから始まった教育課程開発のミッションであった。しかし、授業実践を通して同僚と語り合い、教職大学院のチーム演習や指導教員とのリフレクションを続けてきたことで、問いの変容が見えてきたように思える。そして、この問いの変容が教師の教育観の変容に連動し、それが教師としての学びそのものなのではないかと感じている。

5. おわりに

附属松本小学校研究紀要（2015）に「今、この時この場所で、教師としての私たちは子どもと共に問いを生きている。あらためて本校先達川井清一郎先生の教育思想に出会い直す。」（第1部 p.10）と書かれていた。

「こゝに児童も生き我も生きる 共に本氣な道が開ける」 “子どもの問いに誠実で在れ 対象の問いに本気で在れ 教師自身の問いに正直で在れ そうすれば、子どもと教師の道は自ずと拓かれる”
--

「川井先生が未来へ伝えたかったことはそういうことであろうか。松本小学校に脈々と流れる魂を今編み直していきたい。」（第1部 p.10）と綴った当時の研究主任の言葉に込められた思いに、今まさに私は向き合っている。時代は変わっても、教師を取り巻く環境が変わっても、忘れてはならないものがここにあるのではないかと思う。2年前に初めて読んだ時には私の中に入ってこなかったこのくだりが、今の私には切実に響いてくる。そして、今、ここに立ち還りたくなっている自分がいる。

文 献

・附属松本小学校（2015）．学びを拓く・未来を拓く．研究紀要．第1部 p.10